

自閉スペクトラム傾向のある児童に対する登校改善支援

多角的なアセスメントによる生活リズム改善に関する介入事例

○平野晋吾 神野 愛

(福山市立大学教育学部) (茨城大学特別支援教育特別専攻科)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症, 生活リズム, 登校

1. 問題と目的

自閉スペクトラム症(ASD: Autism spectrum disorder)児の44~83%(Richdale, 1999)は何らかの睡眠障害を持つといわれ、生活リズム形成不全による不適応は日常的に指摘されている。学校への登校は学齢期の子どもたちにとって、生活リズム形成の土台となり得るが、こだわりの強さ、社会性、認知等の発達のアンバランスによる学力不振等が原因で登校そのものに困難を抱えるASD児も少なくない。

一部のASD児にみられるような、障害と優れた才能を併せもつ状態に対する「二重の特別支援を要する教育(2E: twice-exceptional)」では、社会性の困難や書字の困難、自尊心の低下などが主訴になる子どもが対象になることが多く、2次的に学校での不適応に繋がる事例もある。

本研究は、登校意欲に乏しくASD傾向のある低学年児童に着目し、総合的なアセスメントに基づいて、強みを活かした、登校改善に資する支援の在り方について事例検討する。

2. 方法

参加者: B小学校通常学級に在籍する児童A(3年生, 男)であった。登校することに困難があり、2年次から始業時刻以降の保健室登校及び早退が続き、寝つきの悪さや起床困難もあった。家庭・学校の主訴は、安定した登校と学力保障であった。アセスメントの結果、全般的な知的発達(平均の域であったがアンバランスがみられた。言語理解VCI(平均の上)や算数(非常に高い域: 12歳2か月齢), 知覚推理(平均域)や処理速度(平均域)は平均以上であり、論理的思考能力も高い一方で、ワーキングメモリWMI(平均の下), 聞く力, 書く力, 図地分離の弱さとともに自閉スペクトラム(AS)傾向もみられた。観察からは、登校渋り、国語参加の質の問題、漢字・カタカナの再生(書き)困難、漢字テストへの不参加などが示された。

手続き: B小学校との協議を経て、保護者にインフォームドコンセントを実施し、署名・捺印によって研究協力の承諾を得た後、インテーク、小学校での計11回の観察(約3ヵ月間)、WISC-IV、小学生の読み書きスクリーニング発達検査、フロスティック視知覚発達検査、ASSQ-R、ADHD-RS、LDチェックリスト、S-M社会生活能力検査及び生活リズム検査(睡眠日誌)による、総合的なアセスメントを実施した。その結果に基づいた教材及び支援計画を立案し、保護者・学校等の支援会議を経て支援を行った。

支援: 2学期に8週間支援を実施した(int.1~8)。**1)漢字の学習方略支援:** アセスメントで明らかになった強みを活かした学習となるよう、視覚支援を取り入れながら漢字をパーツに分け言語化する方略の獲得を支援した。この方略をA児は「A方略」と名付けた。漢字の学習数は原則自己選択とし、学習時間に見通しを持ち、苦手意識の軽減ができるよう工夫した。支援開始時と終了時に確認テストを行った。**2)自立的な登校意欲の改善:** 構造化、達成基準の明確化と成果の視覚的・言語的フィードバックを通して達成感を実感しやすい環境を構成した。また支援4回目(int.4)に、ソーシャルストーリー™(SS)を用いて朝から登校することの利点を考える時間を設定した。

3. 結果

漢字の方略支援: 支援日毎に学習の効率化が進み、最終テストの正答率は91%であった。また、学校における漢字50問テストへの参加率は、支援前は0%であったが支援後100%となり、得点は全て90点以上であった。第1回支援においては「漢字や文字を書くことが嫌」という発言がみられたが、支援後のアンケートでは、漢字の学習が「楽しくなった。なんか簡単になった。自信がついた。」と答えた。

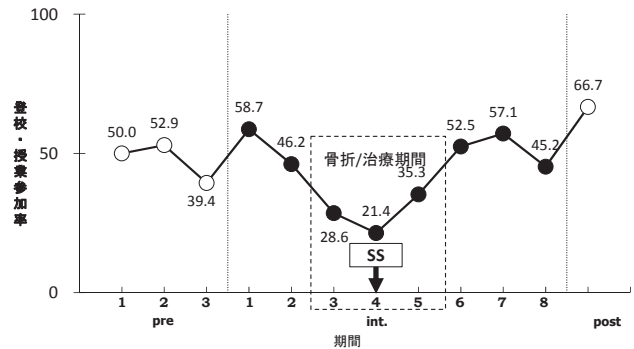


図1. 支援前後の登校・授業への参加状況

登校に関わる改善: 図1に示すように登校班と授業への参加(保健室を出てクラスで授業を受ける)が可能であった割合は、支援後6割を超えた。骨折治療期間には、一時的に参加率が減少し、SS実施後、緩やかに上昇した。細かく分析すると、post期の授業においては体育・図工・理科への参加率は改善し、国語を含め、その他の教科は微増にとどまった。また、自立的な登校に関しては登校班への参加率が非常に高くなり、教員へのインタビューにおいては「登校は安定してきた。学校の滞在時間が増えた」とことが示された。加えて、登校改善に伴う起床時の自立的行動の増加も報告された。

4. 考察

多角的なアセスメントに基づき、強みを活かした生活リズム改善指導法開発の一環として、リズムの起点となりうる登校改善支援の在り方について検討した。本事例においては、授業参加を支える学習方略獲得が達成感や自尊心の向上に繋がり、学級での成功体験は登校意欲を向上させ、それらが自立的なリズム改善のきっかけになり得ることが示唆された。一方で、座学教科への参加率が低いこと、強い力(本児の場合、算数)への「特別な支援」や生活リズムの客観的な評価が不十分であった点などは改善すべき課題であろう。本人や家族が主体となった生活リズム形成の在り方についての議論が必要である。

(文献) Richdale(1999). Sleep problems in autism: prevalence, cause, and intervention. *Developmental Medicine & Child Neurology*, 41(1), 60-66.

(HIRANO Shingo, KANNO Ai)

※本研究の内容の一部は、白鷗大学教育学部卒業研究(論文執筆: 根元莉子(平成27年度卒), 神野愛(平成28年度卒))の成果である。また科学研究費補助金若手研究(B)「自閉症スペクトラム障害児の生活リズム評価法と現状改善型指導法の開発」(課題番号26780522)の助成を受けた。